

[書 評]

Frédéric Nef

*La connaissance mystique: Émergences et frontières*

Paris: Les éditions du Cerf, 2018, pp. 432,

ISBN: 978-2-204-11381-6, 153 × 32 × 242mm, € 29.00

---

村 上 寛

パリ社会科学高等研究院教授でジャン・ニコ研究所の所員でもあるネフは、形而上学や論理学の方面ですでに多数の書籍を出版しているが、タイトルに「神秘 *mystique*」という単語が入るのは本書が初である。

私見では、ネフは本書で形容詞としての神秘の復権、そしてその神秘についての新たな認識可能性を示そうとしているように思われる。

しかし神秘とは何だろうか。「一般的には一切の経験を越えた経験、全ての認識を越えた認識として理解される」が、ネフは差し当たり範囲を限定するために一神教的文脈としての「西方神秘」(D. C. Butler)の範囲で神秘を「神あるいは神性の直接的経験、神との合一」と定義する。密教やシャーマニズム、薬物を用いた神秘体験なども含まれる神秘という用語をこのように定義する理由は、一つには19世紀以降に名詞化した神秘主義 *mysticism* 及びその古代への逆照射による神秘理解を避けることがあげられるが、より大きな理由としては著者が神秘を創発 *émergence* という観点から捉えようとしていることによるものだろう。

創発は生物学に由来する用語で、各々の構成要素単体では実現されていない事象が、複数の構成要素の集合によってその集合体がそれまで個々の要素には見られなかった新たな特性を発揮する現象のことを言う。本書第一部はこの創発を巡って展開されるが、その主要な目的は神秘を文学あるいはディスクール、心理分析へと還元することに対する抵抗である。つまり神秘(特に神秘体験)に関する記述を個人々の主観的体験として、また歴史状況に限定されたものとして細断するのではなく、そこに創発を見るのであり、裏返せばそこに創発を成り立たしめる何ものか(共通性でもなく、実体でもなく、もちろん神とも言えないもの)を指定するのである。

このことは、西洋におけるいわゆる“神秘主義的”テキストを17世紀に成立

した名詞としての神秘主義 *la mystique* の名の下に捉えようとするのではない。そのような観点からは、中世から近世へ、また近世から中世へのそれぞれの間で断絶に直面せざるをえないからである。だからといってネフは本書で、新たな通時的観点による西方神秘の史的記述を試みているのではない。創発という観点によって「神秘の実在についてそこに含意されるもの *les implications* をあらわにすること」を試みているのである。

本書の副題は「創発と限界 *frontières*」であり、第二部はこのような神秘についての認識について、その限界線あるいは境界線が探究されている。

ネフが神秘認識 *connaissance* あるいは神秘の認識論 *épistémologie* として狙いを定めるのは、神秘における最も卓越した認識の対象がどのようなものであるのか、またこの認識においてその対象に到達し明言することを可能にする手段がどのようなものであるのかを示すことである。西洋神秘という枠組みにおいて最も卓越した認識対象はむしろ神であるが、それがア・プリオリなものとしての感覚的知覚 *perception* の対象になりえない最も不可知なものであることは言うまでもない。そして伝統的に神学の領域に帰されてきたこの神認識を巡る問題について、スコラ学と「観想或いは愛への傾向を基盤とする、経験的学知 *science* である神秘神学」という二つの区分が存在することを指摘する。

神探究のある種的手段や表現、あるいは「否定の神学的アプローチ」としてマリオン (J-C. Marion) やデリダ (J. Derrida) を援用しながら論じられる否定神学と区別されるころの、ここでいう神秘神学はほとんど観想 *contemplation* と同一視されるものである。ネフは、中世に“中世の神秘主義”が存在し、17世紀における「主観的神秘主義」との間に断絶を見るという態度を否定し、リベラ (A. de Libera) による「中世において「神秘」は、神学の一つのタイプを規定することのみ用いられる形容詞であり……中世の神秘についての観念は非記述的なものとして考えるべきである」という主張を引用しつつ、中世を通じて形容詞的なものとしての神秘神学がゆるやかに主観的神秘へと向かっていったと主張する。

つまりネフが中世における神秘認識の問題として対象にするのは、観想及び抽象化としての神秘に対立する感覚的な神秘 *mystique affective* であり、それらが示す創発的内実についての認識可能性の問題であり、知性論的な思弁神秘への認識論的アプローチは神秘の問題ではなく哲学の問題として本書ではいわば棚上げされている。神秘についての研究である本書がエックハルトに関する体系的な扱いを欠いていることについてネフは、エックハルトが神秘家というよりは哲学者であること、また近年多数の優れた研究があることをあげつつ、やはりその欠如について弁明が困難であると述べるが、それはこのような神秘神学の定義及びそのアプローチの手法に由来するものであると言えるだろう。

しかし観想とは何だろうか。ネフは、観想がそれ自体においては感覚的でも言

語的でもないが、ある種の様態を越えた認識方法であると主張することを目指す。否定と欠如、対立の概念について再検討した上で、神秘の内的解釈へ、神秘経験における神の知覚の問題へと踏み込んで行くのである。神秘経験と言った場合、いわゆるビジョンや日常を逸脱した身体的感覚が想起されうるが、ここで想定されていることは無論、そうした超常経験についての分析や知覚可能性の問題ではなく、我々を一切の現前から遠ざけるような蕩尽 *engloutissement* や喪失 *perte* として示されうるような探究の頂点としての経験である。

ネフは観想に関する三つの潮流を示す。ユダヤにおける預言者のビジョンとしての観想、修道院霊性における見ること *speculatio* と同一視される観想及び生の一つの様態である観想的生 *vita contemplativa* としての観想、そして形而上学、特にプロティノスにおける主客の差異の抹消及び接触 *contact* (R. Arnou) であり合一であるところの観想である。その上で、十字架のヨハネが「観想と神秘神学を再び一つにした」ことの意義を強調するが、このことは神秘あるいは神秘神学の発展史として捉えるべきではない。パウロにおける神的拉致 *rapture*、クザーヌス、『不可知の雲』(*The Cloude of Unknowing*)、バルマのユーグ (Hugues de Balma) 及びカルトゥジア会のディオニシウス (Denys le Chartreux)、ハルピウス (Harphius van Erp)、新神学者シメオンらを取り上げながら、観想の極地としての神の直接的経験あるいは神秘経験に創発を見ているのである。

神秘経験そのものは言表不可能であるが、神秘経験の後には神秘認識があり、その概念的内容は本物の *authentique* 認識と一致するとネフは主張する。つまり、「一般的にそれ自体性 *l'ipséité* についてその概念的或いは感覚的意味内容が存在しないように、神的それ自体性 *l'ipséité divine* についての感覚や概念の内に意味内容が存在しない」が、「経験的認識」としての観想においては神秘経験そのものについて認知 *cognition* 可能である。「神的な言表不可能性はあるが、その言表不可能性が認識を妨げるのではない」のである。

ではそのような認識を可能にする器官は何だろうか。当然フィジカルな感覚器官ではない。ネフは、霊的感觉による神の知覚可能性についてのソドロウ (A. Saudreau) とプーラン (A. Poulain) の間の論争を手がかりに、霊的感觉によって神が知覚可能であるとか、感覚的構成要素を含まない全体的存在が知覚 *perception* の対象になりえないといった論点ではなく、いわゆる神秘経験における媒介なき交流である神的接触 *touche* や愛撫 *attouchement* として受け取られる非概念的把握 *appréhension* をともなう神秘認識 *connaissance* を問題にする。かくして、このような認識においては、「どのように知覚するのか」という問いについてまわる「何を知覚するのか」という問いに (主意主義的な意味で) 先行する対象が暗示されることをもって「認識論が存在論へと行き着く」ことを本書は示すのである。

評者の興味関心の問題かもしれないが、このような論理展開と結論には一つの懸念と若干の物足りなさを感じることも事実である。懸念とは、神的接触における認識が双方向的 bilatérale であることが十字架のヨハネやサン＝ティエリのギョームの例とともに示されることにおいて顕著のように、結局のところ本書は壮大な論点先取ではないのかというものである。評者が感じる、神秘認識について認識を問題とするなら、知覚との対比検討だけではなく、認識それ自体と対象化された認識との関係を巡る問題について論じるべきだったのではないかという物足りなさは、このような懸念と表裏一体であるように思われる。

ほぼ 100 頁に及ぶ補遺については割愛する。補遺の長さが関係しているのかどうか不明だが、残念ながら本書が十分な時間をかけて構想、執筆されたものであるとは思えない。誤字や脱字が多く、文章の重複や脱落とみられる箇所がある上に、脚注も丁寧とは言えず、表記のぶれもさることながら、原文どころか出典が明記されない引用が数多くあるなど充実した脚注になっているとは言い難く、全体として出版を急ぎすぎた感は否めない（実際、結論では弁解のような記述がある）。

そのような事情はあるにせよ、著者が長年積み上げてきた知識と思索を存分に盛り込みながら神秘に取り組む本書は、神秘を史料編纂的な態度で扱うのではなく、かといって信仰の次元に限定するのでもなく、真理探究の内に引き戻すことを目指すものであり、神秘研究の新たなステージへの境界で、その出発点を整えてくれている研究であると言えるのではないだろうか。